

私たちが、植物の種を蒔く場合、土をよく耕した畑に、穴を掘ったり、溝を作ったりして、そこに慎重に種を入れては、土をかぶせ、最後に水をやって、世話をするのが普通です。無駄になることが最初から分かっているような場所に種を蒔いたりしません。

ところが、イエス様が活動された頃のイスラエルでの種まきは、それとは違っていました。おそらく麦の種を頭に描いての話でしょうが、秋になって、小麦や大麦の種を畑に蒔き、そこに、動物の首に、くびきをかけて引かせる鋤を使ってその畑を耕させ、それから冬の雨を待つという手順だったようです。

4種類の土地が、たとえ話には出てきましたが、「道端」というのは、お百姓さんが歩いたためについた畑の中の道であって、車が往来するような道路のことではないでしょう。「石だらけの所」というのは、岩の多い土地のことで、風で土が運ばれて来ると、「道端」も「石だらけの所」も、種まきの時期には、あまり区別ができなくなるようです。「いばら」というのも、土の中に残っていた根から、後になって茂ってくるわけで、種まきの時には、見えなかったものです。

そんなわけで、4種類の土地というのは、同じ畑の中で、少しずつ種の取り巻かれた環境が違ったところを説明したのであって、わざわざ道路の真ん中とか、岩のごつごつした荒れ野に種を蒔きに行った、というわけではありません。ましてや、茨が生い茂っている中へ種を入れた、ということでもありません。

ですから、イエス様から、この種まきの話を聞いた人びとは、私たちよりも、違和感なく、この話を聞けたらと思います。

ここで、私たちが陥りやすい読み方として、自分を、この4種類の土地のどれにあてはまるか、それこそ、血液型が、これも4種類ありますが、あの人がこんな行動をするのは、A型だから、などと考えてしまうのですけれど、それと同じように、「あの人は道端タイプ」「あの人は石だらけタイプ」「あの人は茨タイプ」という風に、他人や自分にレッテル貼りをするのが正しい読み方、と思われています。

確かに、今日の福音書の1節から9節が「種を蒔く人のたとえ」であるのに対して、18節からは、「種を蒔く人のたとえの説明」ということになっていて、説明の方では、4種類のタイプを解説しています。

そして、ブルナーという神学者は、2番目の、石だらけの所に蒔かれたものは、「御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起ると、すぐにつまづいてしまう人。」とか、3番目の、「茨の中にまかれたものは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人、」などについて、これらの人は、「神の国の福音を片手で受ける人だ。」と説明します。「御国の言葉の力を心から信じないで、片手で受けるが、他の片手は別のものを握りしめています。その結果、心が分裂し、実を結ばなくなるのです。福音の力は不十分だとして、政治的、社会的、経済的活動を教会の名でして、御国の言葉の力を補おうとする形となって現れるのも、そのためだ、と言うのです。

しかし、このような、人間を4つのタイプに分けることが、このたとえ話の目的だったとは、思えません。以前、ファイブゴスペルズ、という本のことを話したことがありました。現代の新約聖書の学者さんたちが、イエス様のことばについて、「本当にイエス様が言われた言葉か」「これに近いことを言われたか」「イエスさまらしい雰囲気は感じられるか」「まったくイエス様が言われたとは思えない」その4つに分けて、4つの福音書とトマス福音書を投票で色分けしたのです。そうすると、前半のたとえ話の部分は、高いほうから2番目で、おそらくこれに近いことを言われただろうが、後半の説明部分は、一番下のランク。初代教会の人々が、道徳的指導をしようと思って書き加えた部分だ、というのです。

イエス様は、種を撒いている人のことが言いたかった、あるいはその人が蒔いた種それ自身のことを話したかったのだらうと思われるのです。

この教会にも、ギデオン協会の山路先生などが来られましたが、（現在はコロナで休止中）以前別の所で聞いた話です。ギデオン協会は、お金を取るのではなく、無料で新約聖書を配布するのですが、もう亡くなったギデオン協会の人ですが、その人の先輩と一緒に聖書を配っていた頃のことを懐かしがって話してくださいました。「聖書を配る時、ギデオン協会の先輩は、『パンを水の上に投げるんだ。』と言われていた。」と言うのです。

今は新共同訳聖書ですが、当時は、口語訳聖書で、旧約聖書の伝道の書と言われる書物の11章1節に「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」という言葉があるんですね。現在の新共同訳では、コヘレトの言葉11章1節ですが、

「:あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」

パンというのは、生活の必需品です。その貴重なパンを、流れる水の上に投げろ、流してしまえ、と聖書は言うのです。

パンは、聖書を象徴しているとも言えます。わたしたちが生活するためには、体にパンが必要なように、心には、聖書の御言葉が必要だ、ということでしょう。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉で生きる」という言葉からもそう言えるでしょう。

その大切な聖書を、すぐにゴミ箱に捨てるかもしれない生徒に渡して、効果があるのか、という批判があります。しかし、ギデオン協会の人びとは、このコヘレトの言葉を信じて、いつかこれが実を結ぶ時が来る、と信じて配っているのです。

同じように、新約聖書にも有名な言葉があります。ヤコブの手紙1章21節

「だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」

これを以前の口語訳聖書で読むと「だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。』『御言にはたましいを救う力がある』と言うのです。

古代エジプトの壺が発見されたら、その中に、種があって、何千年もの眠りから覚めて、芽を出した、というニュースが、昔ありました。日本でも、万葉の頃のハスから花が咲いた話があります。種には、生命力があるわけです。そして、聖書の言葉にも、やはりそれ自体に力があることを私たちはギデオン協会の人びとと同様に信じようではありませんか。

石だらけの土地や茨の中に落ちた種も、ちゃんと芽を出したことに、私たちはもっと注目する必要があるでしょう。効率のいい、良い土地だけに種を蒔くのではなく、効率が悪いのではないかと考えてしまうような、川の上にパンを投げるようにして、御言葉を伝えてみる。手紙に聖書の言葉を添えてみる、とか、集会の案内に、何か言葉を添えてみる、そんなことの一つ一つに、私たちは御言葉の力が働くような気持ちがするのです。

そんなチャレンジを、イエス様は弟子たちや群衆への説教で語られたのではないのでしょうか。

(おまけ)

「種まく人」のマークについて



創業者岩波茂雄はミレーの種まきの絵をかりて岩波書店のマークとしました。茂雄は長野県諏訪の篤農家の出身で、「労働は神聖である」との考えを強く持ち、晴耕雨読の田園生活を好み、詩人ワーズワースの「低く暮し、高く思う」を社の精神としたいとの理念から選びました。マークは高村光太郎（詩人・彫刻家）によるメダル（左写真）をもとにしたエッチング。



岩波書店の「創業者岩波茂雄はミレーの種まきの絵をかりて岩波書店のマークとしました。茂雄は長野県諏訪の篤農家の出身で、「労働は神聖である」との考えを強く持ち、晴耕雨読の田園生活を好み、詩人ワーズワースの「低く暮し、高く思う」を社の精神としたいとの理念から選びました。

マークは高村幸太郎（詩人・彫刻家）によるメダル（左写真）をもとにしたエッチング。

（上の文字を判読しました）